



全国市長会会長（長岡市長）

森 民夫

長岡花火に込められた想いを、 世界に伝える

今年も8月2、3日に「長岡まつり大花火大会」が行われ、過去最高の103万人の皆さんにご覧いただきました。長岡花火は昭和20年8月1日の長岡空襲の犠牲者への慰霊と町の復興、そして世界平和への想いを込めた花火大会です。今年の大花火大会に合わせ、姉妹都市であるアメリカ・ハワイ州ホノルル市のコールドウェル市長をお迎えし、終戦70年を迎える来年8月に向けて両市が共同で記念事業に着手することに合意しました。青少年の交流をはじめ、長岡花火を真珠湾で打ち上げることを目指すことにしています。

真珠湾攻撃を指揮した連合艦隊司令長官山本五十六の出身地である長岡市とホノルル市は、不幸な歴史を乗り越えて平成24年3月に姉妹都市となりました。

遡ると、平成19年8月にホノルル市で開催された日米市長交流会議に参加した際に、当時のハネマン市長と平和交流の意義について意見を交わしたのが最初の接点でした。その後、相互に親善訪問団を派遣しあったり、平和・教育交流の一環としてパールハーバーのアリゾナ記念館と長岡の山本五十六記念館・長岡戦災資料館の3館の交流を合意すること等を通じて、山本五十六が日米開戦に反対していた事実を伝えることを含め、相互理解と交流を着実に続けて現在に至っています。

これまでの交流において長岡花火をホノルルのワイキキで3回打ち上げるなど、花火は交流の促進に重要な役割を果たしています。もちろんその大きさや華やかさに驚き喜んでいただくことも一つの要素ですが、長岡花火に込められた慰霊と復興、平和への祈りは、長岡市からの大事なメッセージです。今年3月に打ち上げた際、コールドウェル市長は「アメリカの花火は新年などのお祝いに打ち上げるものですが、長岡花火は長岡空襲で亡くなった方々の慰霊と平和の祈りが込められている花火です。その花火がワイキキで打ち上げられるということは意義があることです。」と言及されました。文化の違いを超えて長岡の想いを真に理解していただいたことを実感し、今回、真珠湾での長岡花火の打ち上げに思い至りました。

全国の自治体における国際交流のあり方は、幅広くかつ深化しています。そして、それぞれの地域の実情に応じて様々なかたちがあり、交流の先に求める姿も自治体それぞれの特色が出てくることでしょう。国際交流の多様性は、地方自治の多様性のひとつになっています。その中で長岡市は、これからも長岡花火を通して、恒久平和への祈りのメッセージをしっかりと世界に発信していきたいと思っています。